

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office



《教会への提言①》 自己の振り返り

司祭 バルトロマイ 竹内 謙太郎

日本聖公会のみならず、むしろ世界的といつてよいキリスト教会の状況は深刻な課題に直面していると言わざるを得ない。それは単に聖職者の減少、信徒の減少といったような表面的な課題に留まらない。あえていうならば表面的な課題とは、取り分けキリスト教会においては、その内面的な、また、本来の存在意義がいかなる状況にあるかという問題に直結していると言うべきであろう。キリスト教会の抱える多くの課題は、外部的な影響からと言うより、キリスト教会を構成している、つまりそこに属していると自覚する者たち、すなわち私たち自身のありかたに問題があるといわざるを得ないのではないかと理解する。

とりわけ第二次大戦以降、社会の状況は大きく変化してきている。それは科学の進歩発展から、また、社会的な状況の変化、思想の多元化、ますます増大する人間の能力に対する過大な自信の深化、さらに一方では信仰

的な問題への人々の関心の深まりとそれが必ずしも従来の信仰のあり方とはかかわりが無い状況。これらが重層的に現在のキリスト教会に対する重大な挑戦ともなっていると理解せざるを得ないのが今日私たちクリスチャンをとりまく空気と言うべきでは無いだろうか。率直に言つて、私たちはこのような複雑で反発的な社会の中にあって、いかにしてこれまで継承してきたキリスト教信仰を、具体的に表現し、さらには私たちの日常的な信仰的行為を維持していくか、つまり、キリスト教会の存続を可能にするか、あるいはまた、さらに発展させ得るかが重大な課題なのである。

私たちを取り巻く状況を考慮すると、もはや、これまでのとおり、という姿勢では全く対処できないところまで来ていることは疑いも無い。つまり、それは私たちキリスト教会が、ちょうど、主イエス・キリストが人びとの思いや在り方に対して、ご自分が神の子であるという意味において神の意志の具体的な表現であるとの信仰の原則を堅持しながらも、それらの多様な必要、人間的ニーズに積極的に答えようとされている姿、それを私たちは愛の表れと呼ぶのである



が、その主イエス・キリストの姿の現実化こそがキリスト教会の現状理解と変革への契機となるのではないかと考える。実は、キリスト教会の歴史を辿れば、さまざまな機会と時代の要請に答えて、キリスト教会はそのような変革を繰り返してきた。キリスト教会は決して初代教会を始めとして、一定の時代的在り方に固執しようとはしていない。むしろその時の人びとの必要に答えようとする積極的な変革にたいして臆病ではなかった。現在の自己を変革させようとする積極的な活動こそが、キリスト教会の本質的な姿であったと言わなければならない。

私たちアングリカン教会は、16世紀宗教改革以来、取り上げべき課題への対処を祈祷書の制定という手段で果たしていこうとしてきた。この働きは現在においても決して変化は無い。祈祷書の内容こそが、現時点における自己のあり方の表白であることを確認しておかなければならない。もし、それが重要であると理解するのであれば、私たちは私たちの祈祷書の内容を常に精査し続けなければならない。そしてそれが現在の社会に対しての私たちアングリカン教会の積極的な応答となっているかどうかの検討も必要となるであろう。

ここで具体的な提案を試みたい。もし、私たちアングリカン教会の状況が、私たち自身の信仰的在り方と深く関わっていると理解するのである

(次ページ4段目に続く)

東京教区時報アーカイヴ(3)

宣教への想い

今回は、宣教に関する言葉を集めてみました。宣教にまだ有効な突破口を見いだせず、存続に危機的状況が迫っている今こそ、これら先人たちの言葉に、もう一度目を傾けて見たいと思います。

宣教の基礎工事

司祭 竹田 鐵三



このあたりの家は屋敷が広く、窓の下から「オーイ、居るか」と云うワケには行かぬ。まずベルを

押す、しばらくして門が開く、それから玄関。そう行けば先ずよいのであるが、大抵、大きな犬にオドカされるか、小さな犬に吠えられる。こう嚴重では二度と行く気がしない。アパートはどうか。高い階段をイクツもあがる。目当のドアにたどり付く。ベルを押すとノゾキの窓からジロジロ見られる。「実はこんど来た牧師なんです」と説明する。了解。やつとドアが開く。主人は無愛想。また階段を降りて地上に出る。

そこへ行くと下町の商家や田舎の農家はイイものである。大きな声を出せば大抵誰か出て来る。出て来なければ上がりこんで休んで行く。都会の山の手、インテリの上流階級、すべてはすこぶる閉鎖

的である。

聖公会の教会風俗によく似て居る。

初めて教会に来る人の気持を考えて見るがよい。来るまでには勇気がいる。来ても何が何だかわからないのだ。その上、貴婦人、インテリ連にジロジロ見られたら、二度と来る気になるまい。宣教、伝道の理論、調査はまずおいて、基本的な我々の態度、精神を立て直さねばなるまい。教会へ来る人は皆、主イエスの大切なお客様である。

「凡て労する者・重荷を負う者よ、我に來れ。我なんじらを休ません」という主イエスの暖かい御心に沿って、新しい求道者、未信者を喜び迎える。これこそ信徒総がかりの重要な任務。そのタメには組織も訓練も必要である。教会には、聖職・信徒の団体としての組織は完備されて居るが、求道者・未信者に奉仕する組織、宣教に関する訓練がはなはだ貧弱である。教会内にある同志的結合・団結、はなはだ結構。ただしそれが、本筋をはずれて閉鎖的に傾いたら、教会本来の使命を無視した異端ではないか。教会は世の中の

変わるもの・変らぬもの

司祭 竹内 寛



「見よ、わたしはすべてのものを新たにす(黙示録11章)」 今日へ激変する社会」ということを抜き

にしては、何を考えることも実行することもできない。教会も例外ではない。高層ビルが雨後の竹の子のように建ち、1時間で大阪まで走る列車が出来ようとしている。そうした外観の変化と共に人間自身の生活様式や思想までもが大きく変わりへ成人せる世界」と言われる。つまり昔の人間は国家や教会の権威や保護なしに生きられなかったが、現代人はそうしたものは必要がないと思っている。

全てが激しく変わってゆく。しかし同時に忘れてならないのは、その中にあってへ変わらないものもまた存在していることである。

イエス・キリストによってこの世に与えられた真実、たとえば正義とか愛といっ

れば、聖職者たちは特に、そして信徒も共に、現行の祈禱書を深く読み込む必要があるというべきである。特に、聖職者は、自己を執事、司祭、主教、として確認し、その任に就けた聖職按手式の式文にある聖職であることの基本的な条件を再確認、或いは現時点における社会的責任、信仰的責任のための再解釈が必須条件となるであろうことは言を待たない。

私たち聖職者は、按手式における誓約と主教から与えられた自己への責任の諸条件を現在も確守しているであろうか。或いはまた、変革の必要があるとするならばいかになされるべきかを、信仰的に深化させているであろうかを、振り返るべきではなからうか。すべての聖職者たちが聖人となるべきと言っているのではない。人であることからの欠陥は、私たちの共有するところである。しかし、なおかつ、基本的な聖職者であるとキリスト教会が認める条件を満たそうとする意志と実行は重要であろう。

同じく、キリストチャンであると自己理解する信徒についても同じ課題があるといいたい。クリスチャンとは一体何をする人びとなのであるか。この課題に対する自己解答、すなわち振り返りが、今、求められているのではないだろうか。私たちはこれらの振り返りを協働したいと思うのである。

たものである。正義の形は時代と共に変わっても正義のない人間は考えられない。愛の表現は違っても、聖パウロが言うように、愛は永遠にすたることのない、もつとも偉大な神の恵みだからである。

このように激しく変動する世界の中にあつて、しかも永遠不変の神の真実を打ち出してゆかねばならない。そこに今日の教会の仕事の難しさがある。

このことができるためには何が必要なのであろうか。それは教会自身がまず新しくなることである。自己革新は教会の最初からの本質だといつてよい。主イエスが何よりの模範である。当時のユダヤ教はモーセの権威をかさに着ながら、かたくなさで冷酷な律法主義、形式主義に墮落していた。そこから喜びに溢れる本当の信仰を回復するという革新の戦いがイエスである。

これと同じ状況が今日起つている。新しい意識を持った新しい世代の出現とともに、教会は古い世代に見合った衣服を脱ぎ捨てねばならなくなつてきている。過去に作られた制度も礼拝様式も神学も教会暦のようなものも全て、もう一度再点検を迫られているのである。

今日いろいろの新しい聖職像が打ち出されている。結構なことだ。しかしそうした論議に入る前段階として、本当にすべきもう一つの作業が残されている。

それは聖職も信徒も、教会革新への断固たる決意と不動の姿勢を身につけることである。いたずらに過去のしきたりに執着する安易な保守主義は今のようない時代には悪でしかない。

「見よ、わたしは全てのものを新たにす」とキリストは言われる。

【第205号・1972年3月】

しなやかに生きる

司祭 速水 敏彦



聖パウロが今日の使徒書（コリント一：9・16〜23）で語っていることは、「しなやかに」生きて宣教活動をする

ということではなからうか。

しなやかにとは硬直化していないということである。しなやかに生きるとは精神が硬直化していないということだ。硬直化した精神は独善的・排他的な生き方を生む。正統信仰の護持を自負する人々の中に、それはよく見られる現象である。

しなやかに生きるためには柔軟な精神が必要である。柔軟な精神とはユーモアを解する心と言つてもよい。異質なものであるいは、マイナスと考えているものを切り捨てないで、それを受け入れることができるバランスのとれた精神である。しかし、その柔軟な精神は、ずさんな分

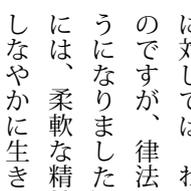
別とか無責任な寛容といったものとはちがう。しなやかさには何ものにもくじけない弾力的な強さが秘められている。しなやかに生きるためには強靱な精神が必要である。強靱な精神とは、どのような苦難にも耐え、苦難の中で真実なものとの出会い、希望を見いだして生きる、そういう生き方を生む力である。

「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました」という聖パウロの言葉には、柔軟な精神と強靱な精神をもつてしなやかに生きる宣教者の生の姿勢が如実に示されている。そしてこれは彼の復活信仰から生まれたものである。

【第464号・1994年2月6日】

浅瀬でピチャピチャ

司祭 澤 邦介



「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい。」（ルカ5：4）とイエスはシモンに言われた。それなのに、あなたたちは漁つて来た魚を生け簀に囲つて、何とかそれを逃がさないように飼つ

ているだけだ。日本の聖公会の宣教姿勢を皮肉つてある外国人がこう言った。

沖に漕ぎ出す勇気を失つて、浅瀬でピチャピチャやつているうち、幾つも開いた穴から魚はどんどん逃げていく。教籍簿や信徒住所録を見て、いわゆる『不参信徒』の数の多さに心が痛む。不参という言い方は好きになれない。私にとつては不快語である。茨に妨げられて挫折した人を蔑むような響きがあるからだ。教会は茨の役割を果たしていなかったであらうか。飲み食い、楽しい人の輪はたしかに『仲良しグループ』を作る。しかし教会の交わりが、仲良しグループの域を出ていないとやがてそれが『茨』に変質する。浅瀬でピチャピチャすることに満足して沖に漕ぎ出すことを忘れていくこと自体が茨の発生である。

【第636号・1998年2月15日】

沖に漕ぎ出す

沖に漕ぎ出すは、古い訳では『深みに乗り出し』となつていた。沖とは教会の外へ遠く、という意味と人の心の深い部分という意味の両方があると思う。心の上つ面だけで仲良くつきあっているなら勇気は要らない。深みに触れる恐れこそ克服されなければならぬのだ。

ミニストリーはむしろ牧師ひとりの働きではない。しかし教会の宣教姿勢を整えるという意味でその責任を痛感している。

【第636号・1998年2月15日】

司祭と語ろう（その13）

司祭 田光 信幸

今回は阿佐ヶ谷聖ペテロ教会で司牧されている田光信幸司祭に、信徒で広報委員の前島 恵と八木昭子がお話しを伺った。

— 私は結婚を期に何となく信者になり、居心地よく教会に来ているのですが、それではダメなのでは、とも思います。

田光 それは良いとか悪いとかの問題ではなく、自分は、この程度でいいやと思っている人に対しては、あなたはそう考えているのですねと言いかないです。しかし、教会が目指すことは個人の領域よりも大きく、そこにズレが生じます。私自身も30代と定年間近とでは、考えていることも大きく異なってきました。

— その辺りを思い出しながら話していただけますか。

田光 1974年に神学院を卒業し、教会勤務を始めてから約40年経ちましたが、その間同じ考えできたかというところではありません。ある意味若い頃は非寛容で、歳をとるにつれて寛容性が備わってくるという

か、自分で気がついて身につけたり、信徒の皆さんに要求されながら、自分の非寛容が徐々に壊され、寛容が身についてきたな一と感じます。

— 先生のお話しの中に非寛容という言葉がよく出てきますが、私たちの理解とは違う意味があるように感じます。

— 先生の非寛容は、自分は真直ぐ。私たちは他人を非難あるいは責める…。

田光 自分は正しくて、そうじゃない人間は正しくないのだから同じですよ。気持ちのどこかにそうした思いを持っているわけで、排除する、避ける、潰そうとする感情は特に熱心な仏教徒でキリスト教嫌いの父親に対する攻撃性に対して持っていたと思う。

— キリスト教との関係は何時頃からですか？

田光 終戦後間もない昭和25、6年頃、母親の思いで日本基督教団の教会幼稚園に入ったのが最初です。小学校は立教で、教



育的環境がキリスト教であった一方、家に帰るとキリスト教には反対の仏教だった。常に宗教的な環境にいたけれども、法事だ祭りだと祭事にせわしない家の環境はおかしいと、幼いころから思ってもいた。

— 高校に入ると、学校や学生寮で指導してくださった宅間信基司祭や森田利光先生と寮母さ

田光 ずっと納得はしていなかったと思うけれども、司祭になった頃は、孫も生まれていたし、仕方ないと思つたのでしょう。親が寛容な態度になつたのは結婚がきっかけだったと思う。

— 奥様の功績ですか？

田光 そうですね。彼女は人とは絶対に対立しない芯の強い穏やかな性格ですし、よくやってくれました。大変だったと思うけれど。

— 聖職になられた頃をお話しください。

田光 僕が卒業した頃は司祭の数も豊富だったけれど、今一番違うのは、牧師館と副牧師館に分かれてはいても、指導司祭と同じ敷地で生活したこと。今は、若いうちから教会を任せられています。

— 最初は聖アンデレ教会で今井 丞治司祭の指導を受けました。聖職候補生は司祭と毎日顔を合わせ、毎日することは掃除がメインだったなあ。

— 正に徒弟制度ですね。

田光 寝食を共にすることがとても大切で良いことだが、今ほとんども出来ない。執事になる前

は実習聖職候補生。掃除を始め、アイロンのかけ方、水の替え方など、細かく教えられた。いわば日常生活が教育の場だった。1年後に執事、その2年後に司祭に按手された。

— 今井司祭からは、教会のあり方や教会の課題としての人権問題や国際的な少数民族への課題を教えられた。宣教的な感性を学ぶ機会になつた。

— 信徒の今村秀子さんは、日本の和解を率先して始められ、韓国の人からも尊敬されていた方ですが、彼女から在日韓国人の置かれている深刻な問題にも気づきを与えられ、宣教の大事な課題に向き合うことができたのは幸運だったと思う。

— その後、聖三一教会に派遣され、独特な個性を持った竹内謙太郎司祭と出会った。当時、彼は国際的な教会の活動に飛び回っていた時期で、特にアフリカとの関係に燃えていた。

— 社会活動家という感じだったのですか？

田光 というよりも日本という範疇を超えて、国際的な当時の現代的な課題に切れ味鋭く取り組んでいた。

最初の記憶として忘れられないのは、就任の挨拶に出向くと、開口一番「何しに来たの？」返す言葉がなくて、玄関に立ちすくんだ。(笑)何かすることがあるんですか？と尋ねると、自分で探してみればと言われ、こんな人の元で働くのかと、非常に戸惑ったのを憶えている。

その時思ったのは、自分に来ることは掃除をすることだなあと。2年間アンデレで仕込まれたから。当時聖三一教会はホコリにまみれて未整理の状態だったから、ここから始めるしかないなと。聖三一教会で最初にしたことは掃除だった。

― お寺の修行と同じですね。

田光 まさにそう。でも、竹内司祭にも弱点があつて、夜中2時、3時まで起きているから朝起きられない。「君、聖餐式は7時半」とかいつても起きてこないから、自分の存在意義を見つけたっていうか。

― 君何しにきたの？という質問に、起こしにきましたって答えましたね。

田光 司祭試験の準備をしようとのことで、毎週2日、それぞ

れ教会史と礼拝学の英書購読の指導をしていただいた。翻訳書の無い本だったのでこちらも必死で、ある意味では楽しく、ある意味では辛いなと思いつながら徹夜で予習した。

― 豊かな司祭試験の準備でしたね。

田光 その頃、韓国の教会との交流が始まった。最初の行動は、日本の教会が韓国の教会を何かしらの物的にも人的にも支援していく形で、協働を進めるということで、誕生したばかりの釜山教区を支援するBT (Busan Tokyo) プロジェクトが始まった。当初、河野、大木、佐藤(徹)、長谷川司祭が短期間滞在し教会形成を共に行い。私はその後家族連れで1年間派遣されました。

その後、現職司祭の中ではおそらく一番多くの教会に赴任したと思う。夫々の教会が特色を持っていて、それが自分の殻を破る力になってくれたが、その度に萎縮した部分もある。

教会での牧会生活とリンクするが、社会的な関心にも向き合うことになった。在日問題や韓国と日本の和解の問題に加え

て、宗教者として「同和問題(部落差別問題)などに関心を持つた。大部はしよるけれども、日本聖公会総会で部落差別発言が起こった。たまたま補助書記をしていて、聖公会にも差別発言があるんだと、強い憤りを感じ、その課題に集中するようになった。

― つまり、東京教区の人権問題の種まきから花が咲くまで関わっておられたわけですね。

田光 そのきっかけを作られたのが大木司祭と今井司祭で、その活動の継続を担わせていただいた。その過程でモットーとしたことは、「神の大路(イザヤ書)を行く」と、「キリストに倣う」です。どんなに社会的な課題に関わろうと、政治的な心情の食い違いがあっても、自分のとるべき道はそれに尽きる。

神の大路を歩む、キリストに倣うという基本を互いに認め合っていていかないと教会は道を間違ってしまう。単なる社会的信条で教会は動くものではないと理解しています。

― 今日はありがとうございます。

「司祭のいのち」

『ナザレのイエス』

教皇ベネディクト16世ヨゼフ

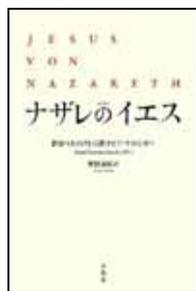
ラツィンガー著(里野泰昭訳)

春秋社(2008年刊)

司祭 ケビン・シーバー

る役割、信じる者と神との交わりを支える役割を聖書が持つことも度外視される。ある意味で豪華な宴を見てその栄養成分を計測するものの食べようとしな人々に似ている。どうりで諸教会が瘦せ細つてきたわけだ。

この数十年間欧米で聖公会を含ま主流キリスト教派が減り続ける原因の一つは、不均衡な聖書解釈方法の影響にあると思う。現代聖書解釈の前提として、いわゆる「歴史のイエス」と「信仰のキリスト」とはまるで別物と見なされる。どんな



も細部まで解体され、一つ一つの妥当性、信憑性がうたぐり深く問われ、自身の多様性だけが強調されて、その一貫性や包括性(正典性)は見向きもされない。

日本の多くの神学校をも牛耳るこのいわゆる歴史的批判的方法では、聖書の啓示性が見失われがちとなる。つまり、神が生きているみ言葉を通して教会にご自分を現してくださった、今でも現し続けてくださっているのだという概念は外される。教会の信仰を形成し、養い、深め

て、信仰の目をもって、しかも一貫性のある正典全体に照らし合わせながら読むことを求め、見事にその見本を不ずるのはこの本。

これを読んで、常に天の父と向き合つて生きたイエスさまの生き生きとした魅力的な姿が見えてきた。決して読みやすいとは言えないが一般読者に向けて書かれているので、ページをめくるごとに豊かな発見が待っている。きつとご馳走になる。

講話「主役は子どもたち」

主教 大畑喜道



力だけを食べ残して帰られました。板前さんは「このイカをこのお客様に美味しく召し上

いろいろな日曜学校の形態がある中で私達が本当に考えなければならぬことは、「自分自身のためや自己実現のためにやっているのではなく子供達を中心だ」ということです。子供達が何を考え何を悩んでいるのか、その子供達と共に聖書のみ言葉に触れてどうやって生きていくのかという「彼らと共に」という視点が欠けていたのではないかと、そのことが今の日曜学校の衰退の一番の原因かもしれない。

がつてもらうためにどうしたらいいのかを自分はちゃんと考えたのか？」と反省し、今までの常識や自分が今まで修行してきたのとは違うやり方で素材を柔らかくして美味しく食べる事ができるように工夫したのだそうです。自分が今までやってきたことをただ繰り返すのではなく、今日の前にいるその人のためにどれだけ自分を変えることができるかが大事なことでと気が付き、それが自分の大きな転換期になったのだそうです。

したが、その教案の有無にかかわらず、「私達が主役、子供達が脇役」といった考えを主客転倒させていかなければいけません。その意味でも日曜学校の礼拝も神様のみ言葉を信じる仲間としてその子供のことをしっかりと考え、どのような礼拝をしたらよいかを私達はいつも問い続けていかなければならないと思えます。



イエス様が子供をまん中に置いて話をされたように、子供のようになりなさいと言われたように、私達の教会の中で本当に子供達がまん中に置かれているでしょうか。その子供も教会の中心メンバーなのだという意識があるでしょうか。

今、聖公会にとつての5指標《宣教・奉仕・証し・礼拝・交わり》を丁寧に行っているというところが再確認されています。その5つの事柄においても「子供達と共に」という点を常に忘れないようにしてほしいのです。例えば1人や2人であろうともその子供と一緒に涙を流し、子供の世界に自分から入り込んで「このみ言葉はとて素敵だよ」と言えるような日曜学校のスタッフになつてほしいと期待しています。40年前のように数十人も子供達が教会に集まつてくるような時代はもう来ないかもしれません。でも逆に1人2人を大切にしていることができる時代だと考えることができます。その子供達のために祈り、自分が感じたこと感動したみ言葉を伝え、分かち合うことができるような教師になつていただきたいのです。

ようこそ聖救主教会へ



ハモリ隊によるアンセム



毎週行われる愛餐会



現在の教会

東京教区の中で、最も受聖者数が少ないグループに入るであろう聖救主教会。一方、同じ施設内に幼稚園・保育園・学童保育・老人ホームを抱え、一日の施設利用者数は500人を越える大所帯になります！活気あふれる環境の中で、我々聖救主教会が日夜奮闘している宣教・奉仕活動について、ご報告させていただきます。

・歴史

1887年に伝道を開始。1968年に木場で働く青少年のために「深川勤労青少年センター」を開設。また、その後の社会状況の変化の中で「まこと地域センター」が生まれ、今では、教会をベースにししながら、老人ホーム「深川愛の園」、「まこと保育園」、キリスト教幼稚園「キッドスクール」、「ライト学童保育」といった諸施設・活動が展開され、老若男女が集っています。

・主日礼拝

牧師が不在であった時期

に、信徒数が激減したこともありましたが、十数年前に神崎雄二司祭が着任され、主日礼拝に参加する信徒数が安定しました。現在は朴美賢（パク・ミヒョン）司祭の指導の下、従来の幼稚園・保育園・老人ホームの関係者以外に、韓国ゆかりの方々も訪れて下さるようになりました。

・日曜学校

以前から活動は盛んです。日曜学校参加者から洗礼・堅信を受ける方も生まれており、かく言う私の家族も「子どもの入園↓日曜学校への参加↓家族で受洗」という黄金パターンです。一方で、これら日曜学校OB・OGと教会が、いかに接点を持ち続けるかが課題となっています。

・オープンマインド

名実ともに『開かれた教会』『地域と共に歩む教会』を目指しており、グループの総力を結集させた「大バザー」「大運動会」は施設利用者・職員・OB・OG総勢1千

人以上が参加する地域の一大イベントとなっています。



こひつじ会のメンバー

またイースターやクリスマスといった教会行事、コンサートや講演会など、大人も子どもも楽しめるイベント活動も行っています。特に「焼きそば部」は年中活動しています。礼拝後にほぼ毎週行われる愛餐会では、子どもも大人も一緒に食事をいただきます。初回参加の方は「無料ご招待」ですので、是非一度お越し下さい！



戦前の教会一大きい！

(ヨセフ 大西新吾)

《信徒リレーエッセイ》

主によって喜び歌え

葛飾茨十字教会 平松 恵子

葛飾の教会に来て3年間、用事のない限り通い続けている。自分でも日曜日の過ごし方の変化を不思議に思っている。その理由は聖歌にあった。好きな聖歌や知っている聖歌は歌うが、知らない聖歌を覚えようという気はなかった。

しかし聖歌集の冒頭に「歌は神への感謝、賛美に対する私達による最高の表現」とあるように、聖歌を歌うことによって神様が「共におられる」と感じられるのではないかと思ひ、ある目標を立てた。それは聖書や祈禱書を読むように、聖歌580曲すべて歌えるようになること。現在教会暦に従って選ばれる聖歌はやはり偏りがあり、同じ歌、好きな歌を選曲されがちなので100%達成するためには葬送の式、聖婚式、聖職按手式、入信と堅信などあまり歌う機会がない歌を覚えていかないと難しい。

昨年、聖歌を選ぶメンバーに加えていただいた。その中で聖歌の歴史や、聖書や祈禱書との関係を学びながら、聖歌とともに育まれていく神への賛美と与えられた神からの奉仕の業を大切にしていきたいと思っている。

「芝公園の窓から」 ⑥

今回は数字の話から始めたい。「1590万」？何の数字だろうか。隣国韓国のキリスト教人口である。『2012韓国人の宗教生活に関する意識調査』によると韓国人口5千万の内、キリスト教

信者は約1590万人で人口の32%。その内プロテスタントは約1100万人(22%)、ローマ・カトリックは約490万人(10%)である(大韓聖公会は6万人)。プロテスタント教会の中で一番信者が多い教派は長老教会で約650万人。しかし韓国における長老教会は「分裂」の代名詞である。「保守主義的根本主義・独断主義の排他主義」と「自由主義神学」論争によって長老教会は「韓国基督教長老会」と「大韓イエス教長老会」に分かれた。そして「大韓イエス教長老会」は世界教会協議会への加入を巡って1959年「合同派」と「統合派」の2つに分かれた。現在長老派に属する教団は200を超えていると推定されている。皮肉なことに、長老教会の最大の教団の名前は「イエス教長老会合同(約290万人)」と「イエス教長老会統合(約270万人)」。合同」と「統合」のものは、独立している二つ以上

のものが一つに合わさること。合同とは、二つ以上のものを合わせて一つにすること。分裂によってキリストの体である教会が幾つにも分かれてしまったのに、分裂によって生まれた教会の名前は「合同」と「統合」なのである。

東京教区は主の恵みによって2013年に教区成立90周年を迎え、100周年に向けて新たな歩みが始まった。これから様々な変化が私たちを待っている。その変化を前に様々な声が聞こえてくる。今こそ私たちが忘れてはならないことがある。それは、私たちは主にあって一つであるということ。私たちの心の中の憎しみ、利己心、頑固、傲慢によって起きる分裂は、「キリスト・イエス」と一つとなった人々の集まりである教会を拒否する心となり、しばしば自分だけのための、自分だけによる、自分だけの教会を構築しようとしてしまう場合があるのではないだろうか。そのような私たちに對してパウロは語っている。

「兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい。(コリントの信徒への手紙Ⅰ1:10)」

(宣教主事 司祭 卓 志雄)

東京教区新年礼拝

「平和と和解の年に」



1月10日(土)午後1時半より聖アンデレ主教座聖堂において、大畑主教の司式・説教による教区新年礼拝が行われた。参加者は信徒、教役者、教区聖歌隊を含め約90名であった。

大畑主教は、年の始まりに共に集い、主の晩餐に与り、喜びを分かち合う時が与えられたことを感謝したい、との言葉で説教を述べられた。

戦後70年目となる今年をどのような年にしたら良いのか。沖縄、広島、長崎での平和を求め祈りにしても、特に節目の年として、これまで以上に平和を求めて祈ることを意識したい。今年は、ロサンゼルス教区で、日本聖公会と大韓聖公会の和解

の礼拝も予定されている。このようなことを踏まえ、今年は、平和と和解の年にしたい。その為の協力と一致を願っている。では、協力と一致の為に、何を大切にするのか。それは、イエスさまが宣教の始めに「神さまのみ言葉は、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と語られたように、神さまのみ言葉を受け、神さまの思いを心に刻み、一つになることではないだろうか。み言葉をしっかりと聴き、神さまの思いをしっかりと受け止め、この新しい年を平和と和解の実現の為に邁進したい、と言葉を結ばれた。

「平和と和解」この言葉は、大畑主教が説教の中で、繰返し語られた言葉である。「平和と和解」

は、社会の問題に限らず、私たちの日々の生活、教会生活においても絶えず心に留め、その実現を求め努力と、祈りを怠ってはならないことだが、あなた自身はどうなのか？と揺さぶられるような思いをした一時でもあった。

(広報委員会)

編集後記

逆説的だがキリスト教は変わるとを恐れない伝統をもっている。それにより2千年間、生きた神と人との関わりをつないできた。今、変えるべきことを変えないのは私たちの怠慢なのかもしれない。W

◆ ◆
イースター号4月5日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (十七)

1. 夢

信徒A「ちょっと不謹慎だけど、昨日の夜、礼拝をさぼって温泉に行く夢を見たよ」

信徒B「そう、でもその夢なら、今日の礼拝の説教中にボクも見たよ」

2. マッサン

信徒A「ニッカ・ウイスキーの創業者のマッサンは、聖公会の信徒なんだってね」

信徒B「そう、でもうちの牧師もニッカ・ウイスキーだよ」

信徒A「それは、ニッカ・ウイスキーが好きってこと？」

信徒B「いや、毎日ウイスキーを飲むのが日課だってことさ」

3. 冒 流

牧師「イエスさまは「祭司(さいし)たち」から神を冒流したとして訴えられ、やがて鞭打たれ、処刑されたのです」

信徒「それは私も同じです」

牧師「どういうことですか」

信徒「私もカミさんを冒流すると「妻子(さいし)たち」からひどい目にあいます」